

IPU・環太平洋大学が目指す授業設計

—2021 年度授業ガイドライン—

※With コロナ、After コロナ、Beyond コロナの時代の教育方法として、対面とオンラインの切り替えを想定したブレンド型の設計を心がけましょう。



令和3年2月28日
教務部 井上 聡

目次

- 1 [2020年オンライン授業の方針](#)
 - 1.1 [アクセス集中への対策](#)
 - 1.2 [サーバダウンへの対策](#)
 - 1.3 [セキュリティ対策](#)
 - 1.4 [ギガ問題](#)
 - 1.5 [学生の生活習慣](#)
 - 1.6 [プライバシー](#)
 - 1.7 [衛生管理](#)
 - 1.8 [今後の課題](#)
- 2 [2020年オンライン授業の点検・評価](#)
 - 2.1 [出席率](#)
 - 2.2 [成績評価](#)
 - 2.3 [DP 到達度調査](#)
 - 2.4 [学生 FD からの要望](#)
 - 2.5 [授業アンケート分析](#)
 - 2.6 [まとめ](#)
- 3 [シラバスの書き方](#)
 - 3.1 [優れたシラバスの条件](#)
 - 3.2 [到達目標](#)
 - 3.3 [成績評価方法](#)
 - 3.4 [授業の方法](#)
 - 3.5 [準備学習](#)
 - 3.6 [卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連](#)
 - 3.7 [授業の概要](#)
 - 3.8 [教科書・参考書](#)
 - 3.9 [授業計画](#)
- 4 [主体性を引き出す授業設計](#)
 - 4.1 [インストラクショナルデザイン](#)
 - 4.2 [設計のための ADDIE モデル](#)
 - 4.3 [学習意欲を高めるための ARCS モデル](#)
 - 4.4 [反転授業による授業設計](#)
- 5 [これからの授業設計](#)
 - 5.1 [同期型授業（≡同時双方向型授業）](#)
 - 5.2 [非同期型授業（≡オンデマンド型授業）](#)
 - 5.3 [ハイブリッド型授業](#)
 - 5.4 [ハイフレックス型授業](#)
 - 5.5 [ブレンド型授業](#)
- 6 [ティーチングポートフォリオの書き方](#)
 - 6.1 [総論](#)
 - 6.2 [授業哲学](#)
 - 6.3 [学習成果](#)
 - 6.4 [授業評価中間アンケート](#)
 - 6.5 [授業評価学期末アンケート](#)
 - 6.6 [リフレクション](#)
 - 6.7 [その他](#)
- 7 [学生に伝えるべき禁止事項](#)
8. [資料集](#)
 - 8.1 [シラバス記入例](#)
 - 8.1.1 [教科書からの対面型](#)
 - 8.1.2 [オンデマンドからの対面型](#)
 - 8.2 [シラバスチェックリスト](#)
 - 8.3 [コマシラバス例](#)
 - 8.3.1 [高次能力習得型（パフォーマンス型）](#)
 - 8.3.2 [完全習得学習型（インプット強化型）](#)
 - 8.3.3 [完全習得学習型（オンデマンド）](#)
 - 8.4 [ARCS モデルに基づく授業アンケート](#)
- 9 [参考資料（HP リンク）](#)
 - 9.1 [グループ分けツール](#)
 - 9.2 [Quizlet](#)
 - 9.3 [国立情報学研究所](#)
 - 9.4 [東京大学](#)
 - 9.5 [京都大学](#)
 - 9.6 [大学 ICT 推進協議会](#)

1 2020年オンライン授業の方針

1.1 アクセス集中への対策

- 事前課題の管理を軸に据え、同期型授業の時短化を図る。
- 学科・教養部門ごとに、同期型授業と非同期型授業の比率を調整する。

1.2 サーバダウンへの対策

- ライブ授業以外、学内の電力を極力使用しない。
- 課題管理に際しては、ユニバーサルパスポートの使用を控え、クラウド型プラットフォームである Google for Education とオンラインストレージサービスである Dropbox を使用する。

1.3 セキュリティ対策

- 同期型授業では Google Meet を、課題管理では Google Classroom を使用し、IPU アカウントを付与された教職員・学生以外の入室を認めない。
- セキュリティを確保できない通話アプリやセキュリティの維持方法が異なる通話アプリ（Zoom, V-cube, Webex 等）の使用を控える。

1.4 ギガ問題

- 課題用の解説動画を含め、授業資料作成の際、データダイエットを心がける。
- 通信環境の整備費として、全学生に一律 30,000 円を支給する。
- 必要に応じて、大学のノート PC を貸与する。



1.5 学生の生活習慣

- 2020 年前期に限り、メンター・ゼミ担当教員が週に 1 回、10 分程度の Meet 朝礼を行う。

1.6 プライバシー

- 学生への配慮として、アイコン&ミュートによる受講を許容する。
- 教員への配慮として、授業情報の二次配信に対して厳格に対応する。

1.7 衛生管理

- 学内で活動する教職員・学生は必ず、検温・手洗い・うがい・消毒を行う。
- 検温で発熱症状が認められた場合、すみやかに大学に報告し、医療機関の指示に従う。
- 対面授業中、30 分に 1 回程度、教室の換気を行う。
- 授業後、使用教室の備品の消毒を行う。



1.8 今後の課題

- 250人程度のオンライン授業や教職員総会に対応できるよう、Google Workspace Enterprise (Plus) のアカウントを複数購入する。
- 対面授業でのPC使用に備え、学内の充電ポートを拡充する。
- 『対面授業＋一部オンデマンド』を基本とするが、感染爆発の場合、オンライン授業への切り替えを速やかに行う。
- オンライン環境でディスカッションを行う場合、信頼関係を構築し、入念な事前指導の上、ビデオオンでの参加を奨励する。

2 2020年オンライン授業の点検・評価

2.1 出席率

- 従来、前期の出席率は80%から90%の間を推移していたが、2020年度前期に関しては、すべての学科・学年において、90%を上回った。
- この結果の原因としては、通学に係る制約がなくなるというオンライン授業の特性、および、課題の提出を出席要件と位置付け、教員が粘り強く対応したことが考えられる。
- 「いつまで課題提出を待つのか？」という議論は残るが、緊急事態宣言のもと、はじめてのオンライン授業であったことを考えると、今回の措置はやむをえないものとする。
- 2021年以降のオンライン授業における出席確認に関しても、デジタルデバイスへの対応を考慮すると、『厳格』に行う必要はないと考える。ただし、学務システムへの出欠確認が遅延しない程度に、明確な基準を科目ごとに設定することが望ましい。

2.2 成績評価

- 2019年後期、全学的な努力により、S評価への偏りを修正し、成績評価の平準化に成功した。しかしながら、2020年度前期に関しては、大半の学科・学年において、S評価の割合が40%を超え、GPAの中央値が3.0を超えた。不合格(D, E評価)の割合は5.56%から3.58%に下がった。
- S評価の偏りに回帰した原因としては、オンライン授業における評価の難しさよりも、これまでの評価方法、すなわち、定期試験を中心とした総括的評価の影響と考えられる。今後は、形成的評価に移行し、毎回の授業において、到達度に関する記録を残すことを推奨する。

2.3 DP到達度調査

- プレゼンテーションやICTのスキルに課題が残ったが、コロナ禍の影響を受けて下がった項目は見当たらなかった。一方、1日の平均学修時間はこれまでの2倍強(45分→90分)に増えた。
- 全国的に不安視された初年次生に関しては、1日の平均学修時間では4年生と同等の量を示したが、礼法、協働性等については、従来の初年次生より下がっていた。開学以来重視してきた「礼法指導」にコロナ禍の影響が出ていたことが示された。

2.3 学生FDからの要望

- 事前課題 提出期限の統一、授業内容との関連、量より質
- 同期型授業 事前課題でのインプット強化、課題と授業の関連づけ、アウトプット活動
- 非同期型授業 コンパクトにまとまった動画、動画の速度調整、フィードバック
- フィードバック 採点・返却、自身の課題の明確化、優れた課題の紹介

2.4 授業アンケート分析（優れた授業の条件）

- 同期型授業 参加型、意見の発信、交流
- 非同期型授業 動画の質、深い学び、交流
- 支持率の高い授業 発信型、活用型、コミュニケーション型
- 授業の質 自分次第



2.5 まとめ

- 成果 学習習慣の改善、ペーパーレスの促進、デジタルスキルの向上、学生の声の反映
- 課題 デジタルスキルの教員格差、事前課題への理解、アセスメントの精度
- 方向性 ①With コロナの時代に対応したハイブリッド型授業
②After コロナの時代に対応したブレンド型授業
③インプット強化のためのオンデマンド授業

3 シラバスの書き方

3.1 優れたシラバスの条件

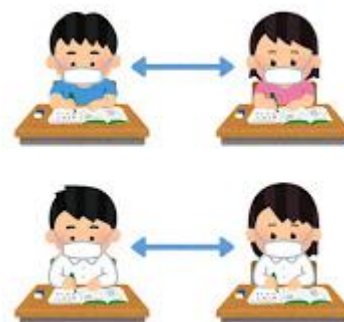
- 到達目標、評価方法、授業内容の整合性を図りましょう。①何を学んで欲しいのか、②それをどのように評価するのか、③どのような内容で実施するのか、の順に考えると便利です。以下、シラバスを考案する際の優先順位に沿って、各項目を説明します。

3.2 到達目標

- 当該授業で求める学習成果について言及しましょう。その際、「～を教える」「～を指導する」ではなく、「～ができるようになる」「～を身に着けている」のように学習者目線で記述してください。箇条書きでも構いません。

3.3 成績評価方法

- 評価項目と配分（比率）を具体的に記入してください。
例：学習態度 20%、小テスト 20%、グループへの貢献 20%、課題提出 20%、定期試験 20%
- 「出席率」や「出席回数」は評価項目に該当しません。出席状況を評価される場合は、「学習意欲」や「学習態度」といった項目をご使用ください。
- 学修成果を定期的に評価できるよう、小テストやループリクを活用し、形成的評価を心がけましょう。「学習態度 60%」や「定期試験 80%」といった、偏った総括的評価は控えてください。
- 同一科目で担当者が異なる場合、評価項目と評価基準を統一してください。



3.4 授業の方法

- アクティブ・ラーニングの要素（ディスカッション、ディベート、グループワーク、プレゼンテーション、フィールドワーク等）について、必ず言及してください。
- 授業運営のプラットフォームとして Google Classroom を採用していますので、Classroom の活用方法を含め、課題管理や授業内容におけるデジタル活用（例：Document, Sheet, Forms, Jamboard, クリッカー、デジタル教科書、動画配信、eラーニング、JMOC等）についても言及してください。

3.5 準備学習

- 事前・事後に必要な学習事項（内容・方法・所要時間）を具体的に記入してください。「詳しくは授業で指示を行う」といった表現は避けてください。
例：復習テストへの準備（1時間程度）、振り返りレポートの提出（1時間程度）
- 学生が主体的に授業に参加できるよう、事前課題の問いを明確に設定してください。事前学習として動画の視聴等を求める場合、深い理解につながるよう、ワークシートを添付してください。

3.6 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連

- カリキュラムマップを参照の上、当該授業科目に対応する DP のナンバーと当該 DP の内容を引用し、卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連性について記述してください。

3.7 授業の概要

- 当該授業の全体的な目的、学修成果、授業方法について簡潔にまとめてください。その際、科目担当者の授業哲学について言及して頂いても結構です。



3.8 教科書・参考書

- 教科書は学生に購入を義務付けるものですので、必ず授業でご使用ください。参考書については、必要に応じて、自主学习用の教材としてご推薦ください。

3.9 授業計画

- 原則、2単位の授業は全15回実施されます。計画表の各回に具体的なテーマと内容を記入してください。その際、「同上」「省略」や空欄は避けてください。
- 第15回授業で習熟度を確認する試験を行う場合、「定期試験」ではなく、「期末試験」とご記入ください。その際、授業時間の大半が試験で占められることのないよう、解説、まとめ、ふりかえりなどを加えてください。
- 4年生の成績評価については、卒業判定を踏まえ、慎重にご判断ください。教務ガイドには、下記のように記されています。
➡卒業年次履修の科目で評価がDのものに限り、前期、後期それぞれ3科目を上限として再試験を受けることができます。再試験を受けようとする学生は、当該科目の成績発表日を含む2日以内に1科目につき1,000円の受験料を納付のうえ、「再試験願」を教務課に提出しなければなりません。再試験に合格した場合の成績評価はすべて「C」となります。同一科目における再試験の回数は1回のみとします。

4 主体性を引き出す授業設計

4.1 インストラクショナルデザイン

- インストラクショナルデザインとは、良い教育活動の条件として「効果」「効率」「魅力」を定め、それらを高めるための手法を集大成したモデルや研究分野、またはそれらを応用して学習支援環境を実現するプロセスと定義されています。
- 「効果」「効率」「魅力」を高めるうえで、「学習目標」(Where am I going?)、「評価方法」(How do I know when I get there?)、「教育内容」(How do I get there?)の順に考案し、それぞれの要素の整合性を図ることが重視されています。

4.2 設計のための ADDIE モデル

- ADDIE モデルとは、インストラクショナルデザインのプロセスモデルであり、分析 (Analysis)、設計 (Design)、開発 (Development)、実施 (Implement)、評価 (Evaluation) の頭文字をとって名付けられています。
- ADDIE モデルでは、授業実践のたびに評価を行い、学習者の再分析、授業の再設計、教材の再開発等を通して、随時、授業改善を図ることが重視されています。
- 「どのような学生が履修しているのか?」「90分をどのように使うべきか?」「その場合、どのような教材を開発すべきか?」「授業実践の結果はどうであったか?」「履修者はどのように捉えていたか?」の順にふりかえり、毎回、修正を加えることによって、授業改善が捗ります。

4.3 学習意欲を高めるための ARCS モデル

- ARCS モデルとは、学習者の動機づけを測定するためのモデルであり、注意 (Attention)、関連性 (Relevance)、自信 (Confidence)、満足 (Satisfaction) の頭文字をとって名付けられています。
- 注意には「知覚的喚起」「探求心の喚起」「変化性」が、関連性には「目的指向性」「動機との一致」「親しみやすさ」が、自信には「学習要件」「成功の機会」「個人的なコントロール」が、満足には「自然な結果」「肯定的な結果」「公平さ」が含まれています。
- ARCS モデルに基づいて授業の点検・評価を行う場合、下記の順番で見直しを図ることが有用です。
- ①出口としての学習目標の明確化➡②入り口としての学習者の特徴➡③出口と入り口の構造化と系列化➡④授業方法(情報提示、アクティビティ、評価)➡⑤学習環境(メディア、サポート)
- ARCS モデルで授業評価を行いたい場合は、8.4の資料をご使用ください。

4.4 反転授業による授業設計

- 反転授業とは、授業と宿題の役割を反転させ、授業時間外にデジタル教材等により知識習得を済ませ、教室では知識確認や問題解決学習を行う授業形態を指し、「講義から宿題へ」を「予習(講義)から授業(演習)へ」に反転させた授業と捉えられています。
- 反転授業は理系科目や初年次科目での実践例が多く、学習行動の可視化、時間外学習の実質的増加、学力差の解消、時間の有効活用といった利点が認められています。
- 反転授業の成否は準備学習(予習)の質に影響されるため、予習教材を視聴する意味合いの明確化が重要になります。到達目標の明確化、学習すべき事項の明記、予習状況の事前アセスメントに加え、予習動画の時間をコンパクトにまとめることが不可欠となります。

5 これからの授業設計

5.1 同期型授業（≡同時双方向型授業）

- 「同時」かつ「双方向」で行われるメディア授業であり、授業要件として、面接授業に近い環境で行うこと、たとえば、「授業中、教員と学生が互いに映像・音声等によるやりとりを行うこと」、「学生の教員に対する質問の機会を確保すること」、「必要に応じ、システムの管理・運営を行う補助員やティーチング・アシスタントを配置すること」が求められています。
- 学習時間を確保するためのだけの長時間ライブ授業に意味はありませんので、事前課題に取り組みせたいうえで、フィードバック中心の授業を心がけましょう。また、授業中は、チャット等を活用し、履修者全体に対して、発信を促しましょう。
- 長時間の接続によって、通信環境や集中力に問題が生じるため、15分程度の講義、アウトプット、コミュニケーションを組み合わせましょう。ディスカッションを行う場合、履修者間の信頼関係が構築されている場合はビデオオンでの実施を推奨しますが、構築されていない場合は、各グループに教員やSAを配備することを推奨します。
- 授業設計例：事前課題→採点・返却→授業（良い課題の共有、解説、演習）→意見交換

5.2 非同期型授業（≡オンデマンド型授業）

- 「同時」又は「双方向」である必要はありませんが、授業終了後すみやかに、インターネットその他の適切な方法を利用することにより、設問解答、添削指導、質疑応答等による十分な指導を併せ行うことが求められています。その際、学生が疑問をただちに提出できる環境があること、適切な時期に回答を行うことが必要とされています。
- 指導以外に、当該授業に関する学生の「意見交換の機会」（掲示板の開設）の確保が求められています。これはオンデマンド特有の課題である「コミュニケーション不足」を回避するための要件であり、同期型における「音声によるやり取り」を文字化したものと捉えてください。
- オンデマンド授業は厳密には、「課題提出型」と「映像配信型」に分かれますが、本学では、映像配信の有無にかかわらず、必ず、「事前の問いを明確化すること」、「確実にアセスメントとフィードバックを行うこと」、「Classroomに意見交換サイトを開設すること」を求めます。
- 授業設計例：事前課題（≡授業）→採点・返却・フィードバック→意見交換

5.3 ハイブリッド型授業

- ハイブリッド型授業とは、オンライン授業と対面授業を組み合わせる授業形態であり、ハイフレックス型とブレンド型に分かれます。感染状況によって、対面授業とオンライン授業の切り替えが随時求められることとなりますので、容易に切り換えられるようなイメージを膨らませて、授業設計を行うことが重要となります。

5.4 ハイフレックス（HyFlex：Hybrid-Flexible）型授業

- 同じ内容の授業をオンラインでも対面でも受講できる授業を指します。教員は対面で授業を行い、学生は自身の状況に応じて対面授業、または同時双方向型のオンライン授業を選択します。
- 同一科目を複数担当する場合、ハイフレックス型で実施することによって、特定のクラスを対面で、その他のクラスをオンラインで同時に指導することが可能となります。

- ハイフレックス型の場合、完全オンライン授業への切り替えは容易になりますが、教室環境の設定が複雑になるだけでなく、対面とオンラインの両方の学生に注意しながら授業を行うことになるため、教員への負荷が高くなります。
- 授業設計例：事前課題➡採点・返却➡対面授業と同期型授業の同時進行➡意見交換



5.5 ブレンド型授業

- ブレンド (Blended) 型の授業では、授業の目的にあわせて、対面とオンラインを組み合わせることになります。15回の授業のうち、対面が望ましい回、例えば、初回、グループワーク、最終回等を対面で実施し、インプットの強化を図りたい回をオンラインで実施することが考えられます。
- 指導内容の目的に応じて対面とオンラインを使い分けることによって、高い教育効果を生み出すことができるだけでなく、感染リスクや教室環境の準備の負担軽減にもつながります。
- 対面授業の際に、デジタルを活用したグループワークに習熟させておくと、オンラインに切り替わったのちも、アクティブ・ラーニングを実施することが可能になります。
- 授業設計例：事前課題➡採点・返却➡対面授業またはオンライン授業➡意見交換

6 ティーチングポートフォリオの書き方

6.1 総論

- FD活動の一環として、学期末のたびに、授業の振り返り（リフレクション）を行って頂きます。作成頂いた書類は、データとして学生・教員に公開します。内容は、主として、授業哲学、学習成果、授業アンケートの振り返り、学生へのメッセージとなります。

6.2 授業哲学

- 担当されるすべての科目に通底する、ご自身の教育方針や授業方針について記述してください。

6.3 学習成果

- シラバスで定めた到達目標について記述してください。必要に応じて、対応する DP や非認知能力についても言及してください。

6.4 授業評価中間アンケート

- 授業期間内に Web で中間アンケートを実施します。質問項目は、①注意（知的好奇心）、②関連性（受講ニーズ）、③自信（到達度）、④満足度、⑤コメント（感想）の5点となっています。この結果を受けて、Classroom 上で、履修者にフィードバックを行って頂きます。



6.5 授業評価学期末アンケート

- 学期末に Web で最終アンケートを実施します。質問項目は、①注意（知的好奇心）、②関連（受講ニーズ）、③自信（到達度）、④満足度、⑤コメント（得られた学修成果）、⑥コメント（感想）の6点となっています。この内容を Classroom 上でフィードバックして頂く必要はありません。

6.6 リフレクション

- 学期末の授業アンケートの集計後、授業改善のためのリフレクションペーパーを作成して頂きます。内容は、上記の通り、①授業哲学、②学習成果、③アンケートの振り返り、④学生へのメッセージ、の4点となります。

6.7 その他

- 年度初めに、教育・研究業績をご提出いただきます。

7 学生に伝えるべき禁止事項

- SNSによる授業材料（URL，コード，PW，授業動画，教材等）の2次配信
- 他者への誹謗中傷コメント
- 他の履修者への個別アクセス
- 日常生活を脅かす時間帯のメッセージの送受信
- 著作権の侵害
- 課題の不正作成



8. 資料集

8.1 シラバス記入例

8.1.1 教科書からの対面型

科目コード					区分	コア科目			
科目名	英語科教育法 I				担当者名	井上 聡			
配当年次	2年	配当学期	前期	単位数	2単位	授業方法	講義	卒業要件	なし

<授業の概要>

本授業の目的は、英語科教育の過去と現在について理解を深め、これからの方向性について自身の教育観を醸成することです。そのような資質を高めるため、本授業では、グループワークを軸として、英語教育理論や言語活動に関する討論・発表、および、技能統合型指導の計画・模擬授業実践を中心に進めます。事前課題で問題を発見し、他者との意見交換を通して問題を解決し、プレゼンテーションや相互評価を通して、英語教師としての資質・能力を高めましょう。学習成果として、協働性、批判的思考力、省察力、デジタル活用力を求めます。なお、この授業はブレンド型（対面とオンラインの組み合わせ）で行いますので、PCまたはタブレットを持参の上、臨んでください。

<授業の到達目標>

1. 英語科教育の専門用語を深く理解し、体系化できる。
2. 協同学習に主体的に参加し、多様な役割を担いつつ、グループ・ワークに貢献できる。
3. 未来の英語教師として、自身の意見を適切かつ的確に発信できる。

<授業の方法>

1. 小テスト (10分)
2. 協同学習① グループワークによる教え合い (20分) ※Google Meetによる画面共有
3. 解説+問いの提示 (20分)
4. 協同学習② グループワークによる成果物の作成 (20分) ※Jamboardによる相互評価
5. プレゼンテーションと相互評価 (15分)
6. 意見交換 (5分)

※授業関連の活動(事前課題の提出、小テストの受験、グループ課題の作成、相互評価等)については、Google Classroomで行います。

<準備学習(予習・復習等)>

予習：キーワードの要約(ノートのスクリーンショットを提出) (90分程度)
※事前課題となるキーワードについては、章ごとに分け、Classroomに格納しています。
復習：小テストの準備+Quizletによる用語集の作成 (90分程度)

<卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連>

この科目は教育経営学科のディプロマポリシー⑤(情報機器や教材の活用を含めた学習指導方法の基本とともに、問題解決に向かう論理的・批判的思考力を身に付けている)と関連付けられています。単に知識を習得するだけでなく、汎用的技能(論理思考、協働性、ICT活用能力等)を磨きつつ、英語科教育の課題を発見し、独自の解決策を提案できるよう、主体的に取り組みましょう。

<成績評価方法>

事前課題 20%、小テスト 20%、プレゼンテーション 20%、意見交換 10%、Quizlet 30%

<教科書・参考書>

教科書：JACET 教育問題研究会(編)(2017)「行動志向の英語科教育の基礎と実線」三修社

<授業計画>

略

8.1.2 オンデマンドからの対面型

科目コード					区分	コア科目			
科目名	上級英語文法				担当者名	井上 聡			
配当年次	3年	配当学期	前期	単位数	2単位	授業方法	講義	卒業要件	なし

<授業の概要>

本授業の目的は、大学入試問題として出題される英文法を深く理解し、他者にわかりやすく教える力を磨くことです。デジタル教材とオリジナルテキストを活用して事前に問題点を明らかにし、協同学習や教員との討論を通して学びを深め、さらなる問題演習を通して、大学入試英文法の指導力を高めましょう。学習成果としては、デジタル教材の活用力、協働性、理解力を求めます。なお、この授業はブレンド型（対面とオンラインの組み合わせ）で行いますので、PCまたはタブレットを準備の上、臨んでください。

<授業の到達目標>

1. 事前学習に粘り強く取り組み、「分かること」と「分からないこと」を区別できる。
2. 協同学習や解説の傾聴を通して、「なぜそうなるのか？」を理解し、他者に分かりやすく説明できる。
3. 確認テストや定期試験において8割以上の正答率を残すことができる。

<授業の方法>

1. 小テストと出席確認（10分）
2. 協同学習① 事前学習に関する問題解決（15分）
3. 解説・質疑（10分）
4. 協同学習② 演習と教え合い（30分）
5. 解説・質疑（20分）
6. 意見交換（5分）

※授業関連の活動（事前課題の提出、小テストの受験、事後課題等）については、Google Classroomで行います。

<準備学習（予習・復習等）>

予習：デジタル教材を活用した事前課題の提出（3時間程度）
 ※教材を解いたのち、デジタル教材を用いて、答え合わせ、および、ノートテイキングを行い、指定範囲（毎回、4ページ）のスクリーンショットを提出してください。

復習：小テストの準備+意見交換での発信（30分程度）

<卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連>

この科目は教育経営学科のディプロマポリシー⑧（修得した知識・技能・態度を総合的に活用し、現代の教育課題に積極的に取組み、解決できる能力を身に付けている。）と関連付けられています。デジタル教材を活用しつつ、難度の高い課題に粘り強く取り組むことによって、単に大学受験のための知識を得るだけでなく、文法問題の解法力と説明力を磨くとともに、自律的学習者としての習慣形成を図りましょう。

<成績評価方法>

事前課題 30%、小テスト 20%、意見交換 10%、定期試験 40%

<教科書・参考書>

教科書：井上聡（2021）「上級英語文法：攻略ポイント 210」一粒社
 ※解説用のデジタル教材はClassroomから配信する予定です。

<授業計画>

略

8.2 シラバスチェックリスト

<授業の概要>

- 授業の目的の概要が記述されているか？
- 学修成果の概要が記述されているか？

<授業の到達目標>

- 具体的な行動目標として記述されているか？
- 「～ができるようになる」「～を身につけようとしている」といった文体になっているか？

<授業の方法>

- 授業の構成について記載されているか？
- 構成と関連付ける形で、アクティブ・ラーニングの要素（ディスカッション、グループワーク、フィールドワーク、リフレクション等）が引用されているか？
- 授業におけるデジタル活用方法（Classroom、ICT機器、LMS等）が明記されているか？

<準備学習（予習・復習等）>

- 具体的な内容と所要時間（の目安）が明記されているか？
- 課題管理の方法（ICT機器を使用する場合は、名称と方法）が明記されているか？
- 不適切な表現（例：授業で随時指示を行う）はないか？

<卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目との関連>

- カリキュラムマップを参照して、対応するDPの番号と文章を引用しているか？
- 対応するDPと科目の関係性について補足説明を行っているか？

<成績評価方法>

- 書式（評価項目＋半角スペース＋％＋、）を守っているか？
- 「出席回数」「定期試験 100%」「総合的に評価する」といった表現はないか？
- ゼミナールⅠ・Ⅱの評価項目の中に「ゼミ論文」が明記されているか？

<教科書・参考書>

- 使用しないものを購入させてないか？

<授業計画>

- 「第15回授業 定期試験」や「同上」といった不適切な表現はないか？

8.3 コマシラバス例

8.3.1 高次能力学習型（パフォーマンス型）

（1）科目

- 英語科教育法 I、2 年次前期配当、教職（必須）

（2）指導目標

- 論理思考力、デジタル活用力、パフォーマンス力の養成

（3）事前課題の管理

- 教材とワークシートの用意

➔教材：行動志向の英語科教育の基礎と実践 ※毎回の事前課題（調べ学習）で使用

➔ワークシート ※毎回、15 問程度（定義設問＋意見設問）

- 課題管理

➔Classroom にワークシートを掲示

➔簡易ルーブリックに基づき採点・返却

➔ルーブリック

5：批判的・論理的に記述している。 4：事実中心であるが自身の意見も加えている。

3：事実中心に要約している。 2：ところどころ抜け落ちがある。

1：採点に値しない。

0：未提出

（4）授業

- グループ分け

➔第1 学習社のサイトを利用、掲示

- グループワーク①

➔Meet の小部屋リンクの作成、ストリームへの掲示（担当：メンバーA）

➔事前課題の画面共有、および、ディスカッション（進行：メンバーB）

➔途中経過の発表（担当：メンバーC）

- 解説と問い（担当：教員）

- グループワーク②

➔Google Slide のリンク作成、ストリームへの掲示（メンバーE）

➔ディスカッション（進行：メンバーD）

➔Slide の同時編集（担当：メンバー全員）と提出（メンバーF）

- 発表

➔Classroom の Meet による画面共有（担当：グループ代表）

➔Jamboard による相互評価（担当：履修者全員＋教員）

- 講評（担当：教員）

（5）事後課題

- Classroom におけるルーブリック評価（5 項目×3 段階）（担当：教員）

➔項目例：話し方、スライド（構成）、スライド（デザイン）、発表内容（考察）、協働

- 意見交換サイトの開設

➔「本日の学修成果」の書き込み

➔採点・返却 ※可能なら返信

- 翌週の課題を掲示

8.3.2 完全習得学習型（インプット強化型）

（1）科目

- 実践英文法、1年次前期配当、教職（選択）

（2）指導目標

- 協同学習の効果を最大限に生かした知識習得の強化

（3）事前課題の管理

- 教材とワークシートの用意
 - ➔教科書の範囲指定
 - ➔ワークシート ※設問を30問程度設定
- 課題管理
 - ➔Classroomに掲示
 - ➔締め切りまでにノートのスクリーンショットを回収
 - ➔簡易ループリックに基づき採点・返却
 - ➔ループリック例（正解率）
5：ほぼ100% 4：八割程度 3：六割程度 2：四割程度 1：二割程度 0：未提出
- 模範解答の掲示

（4）授業

- 前回の復習テスト
 - ➔Google Formによる自動採点
 - ➔解説（スコア分布、選択問題の分布状況等）
 - ➔追試の指示 ※後日実施
- ペアワーク①
 - ➔事前課題の教えあい×複数回交代
- 確認テスト①
 - ➔Google Formによる自動採点 ※30問程度
 - ➔解説 ※スコア分布、選択問題の分布状況等
- ペアワーク②
 - ➔テスト①のスコアに基づいてグループ習熟度別に分割
 - ➔事前課題の教えあい×複数回交代
- 確認テスト②
 - ➔Google Formによる自動採点 ※30問程度、ランダム設定
 - ➔解説 ※スコア分布、選択問題の分布状況等

（5）事後課題

- 意見交換サイトの開設
 - ➔「本日の学修成果」の書き込み
 - ➔採点・返却 ※可能なら返信
- Quizletを活用した「学びの整理」
 - ➔単語カードの作成・提出・採点・返却
- 翌週の課題を掲示

8.3.3 完全習得学習型（オンデマンド）

（1）科目

- リーディングスキル応用、2年次後期配当、教職（選択）

（2）目標

- 高度なノートテイキング術の習得、オンラインテストによる習熟度への意識化

（3）事前課題の管理

- 教材とワークシートの用意
 - ➔教材①：英検教材の提供（長文、読解設問、語彙・構文）
 - ➔教材②：デジタル解説教材
 - ➔各自で①をプリントアウト
 - ➔②をもとに詳細なノートテイキングを行う。
- Classroomに掲示
 - ➔締め切りまでに回収
 - ➔簡易ルーブリックに基づき採点・返却
 - ➔ルーブリック例

5：教材以外の情報も詳細に記述している。	4：教材について詳細に記述している。
3：教材の要点を中心に要約している。	2：ところどころ抜け落ちがある。
1：採点に値しない。	0：未提出

（4）授業

- 授業実施曜日を特定
- 理解度確認テストの実施
 - ➔指定日内であれば、受験時間帯は問わない
 - ➔テストはGoogle Formで作成（自動採点、フィードバック機能を活用）
 - ➔設問は、用語の記述・選択・正誤等で構成
 - ➔教科書・解説動画から7割程度出題、応用問題を3割程度出題
 - ➔テスト中の調べ学習を推奨
 - ➔教科書、事前課題（ノート）、解説動画等のフル活用を許可
 - ➔「何回でも受験可能」に設定

（5）事後課題

- スコア（理解度確認テスト）のインポート・返却
 - ➔平均点・優秀者・講評の掲示
- 意見交換サイトの開設
 - ➔「本日の学修成果」の書き込み
 - ➔採点・返却 ※可能なら返信
- Quizletを活用した「学びの整理」
 - ➔単語カードの作成・提出 ※次回の復習テストの準備を兼ねる
 - ➔提出・採点・返却
- 追試の指定
- 翌週の課題を掲示

8.4 ARCS モデルに基づく授業アンケート

<科目の興味度調査>

1. 教師は、科目の内容に関して私たちが熱心に取り組ませる方法がわかっていた。
2. この科目で学習した内容は、私にとって役に立つだろう。
3. 私はこの科目をうまくやる自信があった。
4. この科目には注意をひきつけられることはほとんどなかった。
5. 教師はこの科目の内容が重要だと思わせていた。
6. この科目でよい成績をとるには幸運が必要だった。
7. 私がこの科目で成功するために必要な努力は、大きすぎた。
8. この科目の内容が、私がすでに知っていることとどのように関連するのかがわからなかった。
9. この科目で成功するかどうかは自分次第だった。
10. 教師は要点に近づくときに、ドキドキ感を演出した。
11. この科目の内容は、私にとって難しすぎた。
12. 私はこの科目にかなり満足している。
13. このクラスで私は高い基準を立てて、そこに到達しようとしていた。
14. 私の成績やその他の評価は、他の学習者と比べて公平だったと思う。
15. このクラスの学習者たちは、内容に興味を持っているようだった。
16. 私はこの科目で楽しく学習した。
17. 教師が私の課題にどのような成績をつけるのかを予測するのは困難だった。
18. 私が思っていた自分の課題のでき具合に比べて、教師の評価には満足している。
19. この科目から学んだことに満足している。
20. この科目の内容は私の期待や目的と関連していた。
21. 教師は、興味をひくために普段と違うことや驚くようなことを行った。学習者たちはこのクラスに積極的に参加していた。
22. 学習者たちはこのクラスに積極的に参加していた。
23. 私の目的を達成するために、この科目でよい成績を収めることが重要だった。
24. 教師は、さまざまなおもしろい教授法を用いていた。
25. この科目を受けて何か得をするとは思えなかった。
26. この科目を受けている間に、私はよく空想にふけていた。
27. このクラスを受けていて、十分に努力すれば成功できると信じていた。
28. この科目による個人的な利益は自分にとって明らかだった。
29. この科目の内容について尋ねられた質問や与えられた問題によって、私の好奇心が良く刺激された。
30. この科目での挑戦レベルは、やさしすぎも難しすぎもしないと感じていた。
31. この科目にはかなりがっかりした。
32. 評価やコメントやその他のフィードバックによって、この科目の課題への取り組みが十分認められていると感じていた。
33. 私がこなす必要のある課題の量は、この種の科目としては適切だった。
34. 私は自分がどの程度うまく行っているのかを知るために、十分なフィードバックを得ていた。

<参考文献> 鈴木克明 (2018) 『学習意欲をデザインする—ARCS モデルによるインストラクショナルデザイン—』 (北大路書房), 290-291.

<教材の学習意欲調査>

1. はじめてこの教材を見たとき、自分にとって簡単であるという印象を持った。
2. 教材の開始時に、注意をひきつけられる何かおもしろいことがあった。
3. この教材は、私が期待した以上に理解することが難しかった。
4. 導入の情報を読んだあとで、この教材から何を学習するのかがわかったという自信を持った。
5. この教材の練習を終えたときに、十分な達成感に満足した。
6. この教材の内容と自分がすでに知っていることが、どのように関係しているかは明らかであった。
7. 多くのページに大量の情報がありすぎて、重要なポイントを拾い出して覚えることが難しかった。
8. この教材は人目をひく。
9. この教材がいかに重要であることを示すためのストーリーや例があった。
10. この教材をうまく完了することは、自分にとって重要であった。
11. 文章の質が、私の注意をひきつけておく助けとなっていた。
12. この教材は非常に抽象的で、注意を保ち続けることが困難であった。
13. この教材で学習したときに、内容を習得できる自信があった。
14. 私はこのトピックについてもっと知りたいと思うほど教材を楽しんだ。
15. この教材のページは、無味乾燥で魅力が足りないようにみえた。
16. この教材の内容は、自分の興味と関連していた。
17. ページ上への情報の配置は、私の注意をひきつけておくことに役立った。
18. この教材の知識を人々がどのように利用するのに関する説明や例があった。
19. この教材の練習は非常に難しかった。
20. この教材には私の好奇心を刺激するものがあった。
21. 私はこの教材を学習することが本当に楽しかった。
22. この教材における繰り返しの量が、ときには私をうんざりさせた。
23. この教材の内容と文体は、その内容を知る価値があるという印象を与えた。
24. 私は驚きのある意外なことをいくつか学んだ。
25. この教材でしばらく学習した後に、私はその内容のテストに合格する自信があった。
26. この教材の大部分をすでに知っていたので、私のニーズとは合わなかった。
27. 練習のフィードバックやその他のコメントが、私の努力に対してのふさわしい報酬と感じた。
28. さまざまな説明・練習・図解等によって、この教材に注意をひきつけられた。
29. この教材の文体は退屈するものだ。
30. 私がこれまでの生活のなかで見たり行ったり考えたりしたことと、この教材の内容を関係づけることができた。
31. 各ページに言葉が多くあって、イライラさせられた。
32. この教材を成功裏に修了できたことは気持ちがよかった。
33. この教材の内容は私にとって役立つだろう。
34. この教材のかなりの部分をまったく理解できなかった。
35. この教材の内容が適切に整理されていたことは、学習できるという自信につながった。
36. うまく設計された教材で学習できてよかった。

<参考文献> 鈴木克明 (2018) 『学習意欲をデザインする—ARCS モデルによるインストラクショナルデザイン—』 (北大路書房), 293-294.

<科目の興味度調査>

注意（好奇心）	関連性（ニーズ）	自信	満足度
1	2	3	7（反転）
4（反転）	5	6（反転）	12
10	8（反転）	9	14
15	13	11（反転）	16
21	20	17（反転）	18
24	22	27	19
26（反転）	23	30	31（反転）
29	25（反転）	34	32
	28		33

<教材の学修意欲調査>

注意（好奇心）	関連性（ニーズ）	自信	満足度
2	6	1	5
8	9	3（反転）	14
11	10	4	21
12（反転）	16	7（反転）	27
15（反転）	18	13	32
17	23	19（反転）	36
20	26（反転）	25	
22（反転）	30	34（反転）	
24	33	35	
28			
29（反転）			
31（反転）			

9 参考資料 (HP リンク)

- 9.1 [簡易グループ分けツール \(第1学習社\)](#)
- 9.2 [Quizlet \(マニュアル\)](#)
- 9.3 [国立情報研究所 \(サイバーシンポジウム\)](#)
- 9.4 [東京大学 HP](#)
- 9.5 [京都大学 HP](#)
- 9.6 [大学 ICT 推進協議会 \(AXIES\)](#)